第６回人権労働・参加協働ワーキンググループ 議事録

- 日時：2021 年 4 月 23 日（金曜日）　午後３時から午後４時 30 分まで
- 場所：WEB 会議システムによる開催
- 出席者：山崎卓也座長、河合純一委員、黒田かをり委員、崎田裕子委員、陳浩展委員、土井香苗委員、パトリシア バダー・ジョンストン委員、松中権委員、高橋恭子委員、大川徳明委員、林俊宏オブザーバー

※本議事録では、ワーキンググループを「WG」と記しています。

荒田部長　皆様、本日は御多用中の中お集まりいただき、誠にありがとうございます。

定刻になりましたので、「第６回人権労働・参加協働ワーキンググループ」を開催いたします。

オリンピックまであと 91 日となりました。現在、安心安全な大会開催に向けて、関係者の皆様方と連携をとりながら準備を進めているところでございます。

さて本 WG はメディアの皆様にも公開とさせていただきます。メディアの皆様は冒頭の荒木田副会長のご挨拶まで、Teams 画面をスチール及びムービーで撮影いただけます。会議は引き続き、傍聴いただけます。

本日は、山崎座長はじめ、各委員・オブザーバーの皆様、御出席いただきましてありがとうございます。

また、本日は、ジェンダー平等と多様性の推進担当の荒木田副会長及び小谷スポーツディレクターが会議に参加されます。

なお、前回第 5 回のワーキンググループから委員の変更がありましたので、御紹介いたします。

東京都の加藤いずみ課長から大川 徳明 総務局人権部企画課長に交替となりました。

それでははじめに、荒木田副会長から一言御挨拶を頂きたいと思います。

荒木田副会長　皆様こんにちは。

３月に副会長を拝命し、ジェンダー平等、多様性と調和を担当することになりました荒木田です。どうぞよろしくお願いいたします。

私にとっては、全く新しい分野への挑戦になりますので、小谷 SD リーダーのプロジェクトチームをどのように支えていくべきか、支えることができるかが、私のテーマでした。まずは少しでもキャッチアップしなければとの思いで、この 1 か月あまり皆様の WG の会議録、それから組織委員会の活動をはじめ様々な文献を読んだりしてきましたが、そう簡単に追い付けるものではないと実感しております。

私はかつてバレーボール選手、指導者として、スイス、旧西ドイツそして UK という言語、民族、宗教など多くが入り混じった国で通算 10 年ほど生活して参りました、そして帰国してからも、1 年のうち３分の１くらいは日本代表チームの大会や遠征、会議などで、海外に出て参

りました。そして、私自身国際結婚で、夫婦別姓を選んでおります。

この焦りに焦った１か月で私がたどりついたのは、ダイバーシティ＆インクルージョンという壮大なテーマに身構えることなく今一人ひとりが、学びながら自分の経験も重ね合わせ、一歩踏み出すことの大事さです。

今日のメイン議題は、「東京 2020 宣言（仮称）」でございます。皆様の WG の中でも議論させてきた『ムーブメントを起こす』が今ひとつの形となって前に進もうとしております。多様性を受け入れ、誰もが生きやすい社会を目指す、これはスポーツ界のみならず、日本社会が進む道でもあると思います。内容に関しまして皆様にしっかりと御議論頂きまして、東京 2020 宣言が東京オリンピック・パラリンピックの終了後も１つのムーブメントとして、残していくような活動にしたいと考えております。

今日はどうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

荒田部長　荒木田副会長ありがとうございました。

それでは、プレスの皆様、冒頭撮影はここまでとなりますので、よろしくお願いします。

それでは、山崎座長、一言御挨拶頂けますでしょうか。

山崎座長　ありがとうございます。

こんにちは。座長の山崎です。

今荒木田副会長から話がありましたが、本 WG はメディアの皆様にも参加頂いて公開で実施しており、みんなでつくりあげていく WG、みんなでつくりあげていくオリンピック・パラリンピックを目指すという意図が込められています。副会長からお話がありましたが、御謙遜だと思いますが、いつから入ってこられたとしても、決して遅いとか、勉強不足であるとかということはありません。

この問題は正解がありませんし、とにかくみんなで１つのコミットメント、１つのゴールを目指すことに意味がある、そういうプロジェクトだと思いますので、差別やダイバーシティ、ジェンダー、インクルージョンについては、長い歴史をかけて築いていかなければならないものでありますし、オリンピック・パラリンピックが終わる頃までに全て解決するものでもありません。ですので、このムーブメントを続けていくことが大事で、それを原点として確認しあいながら、公開の議論でプロセスをみんなで共有しながら、開催の機会に恵まれているオリンピック・パラリンピックの機会をプラスに活かして、良いレガシーを残していく議論ができればと思っています。

今日もオープンに議論していきたいと思いますし、こうしたプロセスを共有することで、少しでも多くの人が知識量や経験など関係なく、どんどん参加してきてもらえるようなムーブメントになればよいと思います。

今日も皆様よろしくお願いいたします。

荒田部長　山崎座長ありがとうございます。皆様もよろしくお願いいたします。

本日も、新型コロナウイルス対策の観点で、リモート開催とさせて頂いておりますので、会議のオンライン運営に御協力をお願いします。

資料は事務局で投影します。

改めてのご案内になりますが、本日のWGはメディアの皆様のほか、国・東京都・組織委員会職員・スポンサーの皆様もこの Teams 上で傍聴いただいております。

以降の議事進行につきましては座長にお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

山崎座長　よろしくお願いします。
前回の委員の皆様からの素晴らしい意見を踏まえた上で、アクションの部分について委員の皆様と議論できればと考えています。

最初に事務局から本日の議事について御説明して頂いてから、議論に移りたいと思います。事務局からよろしくお願いいたします。

荒田部長　承知いたしました。
それでは説明いたします。
（事務局からの説明）

山崎座長　荒田部長ありがとうございます。
委員の皆様に、まずは「東京 2020 宣言（仮称）」の方向性・理念について、一般的なところからどのようにすればよいか、御意見を頂きたいと思います。
まず、許されるならば委員の 1 人として「東京 2020 宣言（仮称）」の理解について、話をしたいと思います。

ムーブメントを起こしていくことが大事なことだと思います。今のオリンピック・パラリンピックをめぐる状況が、それに関するある種の国民の皆様の不満だったりすることが正直あるのではないかと思います。この世界的な祭典を開く機会に、どうポジティブなものをつくりあげていくのか、これは正解がない話なので、誰もが意見を言える立場に立てるというところがまずは大事かなと思います。
あと、これは日本社会の特徴なのかもしれませんが、正解を出さなくてはいけないということを恐れているのではないかと思います。間違ったことを言うと批判されるのではないか、という恐怖感もあるかと思いますので、少しでも恐怖感が取り除かれるといいのかな、と思います。言うことは簡単ではないと言われるかもしれませんが、このムーブメントの本質的なところは、誰もが生きやすい社会をつくる、という前回の黒田委員の意見には、私も非常に影響を受けました。誰もが生きやすい社会をつくるというのは、みんなの意見がそれぞれ尊重される、誰かを批判するような状況にはしない、というのがダイバーシティ＆インクルージョンの本質的な部分ではないかと思っているだけに、このムーブメントをみんなやっていこうとなった場合に、正解を考えてしまうと思いますが、どんなに身近なものであっても高尚なものでなくてもいいと思います。このムーブメントの本質は、みんなでこの過程を共有する、アイディアを出し合いうまくいくようになるのがよいということだと思います。インクルージョンは、他人の考えを変えるよりも自分の考えを変えていくことが取り組みやすいと思いますので、東京 2020 宣言がそういった考え方のきっかけになればよいと個人的には思います。
ムーブメントを起こすという意味では、ステークホルダーの皆様もちろんのこと、今日御参

加頂いているメディアの方の積極的な働きかけが不可欠だと思います。その辺りも色々な意見がでるような空気感にしていければ良いと思います。

それでは、委員の皆様からの御意見をよろしくお願いします。

いつも素晴らしい意見をいただいている河合委員からは、前回盗撮についての意見をいただきました。盗撮はアスリートの気持ちに立って考えると我々個人個人が気をつけなくてはならないということだと思います。河合委員から、東京 2020 宣言の方向性・理念・趣旨等について御意見を頂ければと思います。

河合委員　山崎座長、ありがとうございます。

東京 2020 宣言については、以前この WG で話をし、D&I 宣言そもそもはしていただいたと認識しております。そういった中で、もう一歩踏み込み切れてなかった部分というのは、違いを認め合うだとか、知るということはあっても、違いを活かしあうというアクションの部分の、いわゆるダイバーシティという多様性である状態を理解し、認めあうということは言ってきたけれども、インクルーシブな状態をつくるアクションを自分たちが主体となって何かするというところに対してまでは弱かったのではないかと感じています。

そういった意味で今回の宣言について正にアクションの部分の宣言であることは、一つ大きなポイントなのではないかと思います。もちろん個人差、組織間差などがある中なので、いろんなメニュー項目がありますが、そういったことにとらわれず、よりポジティブなアクションとして、どうとらえていけるか、という所が今回大きなポイントとなると思っています。

メニューの中にありますが、できるだけ否定的なアクションではなく、例えば「～のような行動をしない」ということではなくて、「～のようにする」、と前向きに取り組んでいけるようなものがよいのではないかと思います。例えば、点字ブロックがあったところに、「物を置かない」ではなく、「物があったらどかす」とか、「自分でする」とか、「声をかける」というように、ちょっとした発想の転換も含め、メニューに書くなども含めて、ポジティブになれるようなものがあるとより積極的に関与する動機づけにもなるのではないかと考えています。

大会の大きなレガシーの１つとして我々が率先して取り組んでいくテーマだと思いますし、だからこそこの WG が注目されているのだと思います。皆さんの具体的なメニュー案を頂きながら、宣言する人たちそのものも、ダイバーシティな状態、高齢者や子供・男性女性・外国籍の方含めて、色々な方々が個人レベルで宣言でき、組織でも民間・公的機関や組織ごと組織の部署ごとに宣言があふれて、よりよい状態になっていければと思っております。

山崎座長　素晴らしい意見ありがとうございます。

違いを活かすことが D&I の本質で、我々がもっと共有しなければならないと思う部分だと思います。私がダイバーシティ＆インクルージョンを勉強している中で良いと思った本があります。ヨシタケシンスケさんの「みえるとか みえないとか」の絵本です。この本の中は人との違いを楽しみあうといった絵本になります。今の河合委員の話に通じるものがあると思います。

ダイバーシティ＆インクルージョンというと何かやらないといけない、と捉えてしまいがちですが、違いをもった人がたくさん世の中にいるということが素晴らしいことで、活かしあうことができるのだというようになっていくといいという意味では今の河合委員の意見は非常に素晴らしいと思います。河合委員御意見ありがとうございました。

続いて黒田委員よろしくお願いします。

黒田委員　東京 2020 宣言（仮称）の宣言名については、「目指す社会を示すもの」がよいと思っていますが、これから皆様が御議論されるかと思います。河合委員が素晴らしいコメントをされたので、重なってしまいますが、「ダイバーシティ」ということだけでなく、それを受容する「インクルージョン」のところが重要なので、そのために一歩踏み込むというのは全くそのとおりだと思います。

一つ懸念されるのは、東京 2020 宣言というのを組織委員会が出してくるというところです。この中にも書かれているように、「D&I をこの大会で進めてきました」と書いてありますが、一般の方々がそういう認識をお持ちであるかわからない時に、こういった宣言が上からのような形で出さないほうがよいのではという点を懸念しています。今座長が冒頭おっしゃられたように、今オリンピック・パラリンピックの実施については、様々な意見があるというところもある程度は踏まえた方がよいのではないかと考えますと、ムーブメントが組織委員会が「押し付ける」ような形で広がっていくのではなく、大会に直接関係する方たちだけでなく、これまでさまざまな取り組みをしてきた人たちにも自発的に使っていただけるよう、色々な展開につながっていくのが良いと思いました。

あと、ポジティブであるというのは重要ですけれども、これまでこの WG で議論してきたように、こうした宣言が、自分が知らないところで差別する側に加担していた、といったことを含め、そうした差別が行われていること、非常に生きづらさを感じている人が社会にたくさんいるといったことに気づき、理解し、自らの行動変容につなげていくようなものとセットでないと言葉だけが上滑りしてしまうのではないかというところを心配します。

ややネガティブなことを申し上げましたが、こういった宣言がいい形で出て、大会だけでなく、先ほど荒木田副会長がおっしゃったように、社会として一歩進むというようなきっかけとなるとよろしいのではないかと思います。

山崎座長　黒田委員ありがとうございます。

今の御意見は、コミュニケートの取り方に対しての本質的な点だと思います。

オリンピック・パラリンピックをめぐる世論、見方を踏まえて考えると、ムーブメントにするといっても、コミュニケーションの仕方によっては、ムーブメントにならないという結果になってしまうこともあり、そうなるともったいない話になってしまうわけで。だとすると、この話は正解を求めるものではない、ということですよね、目指す社会は同じだけれども方法論や個々人が抱える課題などは様々なものがあるわけで、組織委員会だから偉いわけでも逆でもないですし、それぞれがこの問題に対して等しく関わる立場にある、という点をコミュニケーション上大切な部分にしていくのであれば、プロセスを共有することに意味があるという点をいかにコミュニケーションに出していけるかという話だと思います。誰が正しくて誰が正しくないなどではなく、みんながそれぞれの D&I を実現していく、というようなコミュニケーションの仕方になっていければよいと思います。これはもちろんメディアの方々の御協力が不可欠だと思いますので、そういうところのちょっとしたコミュニケーション上の部分が大事だということで非常に貴重な意見をいただきました。ありがとうございます。

次は崎田委員。前回、「0」というところをキーワードにしたコミュニケーションを展開していこうという御提案をいただきましたけれども、今回東京 2020 宣言の方向性・主旨、この辺りについて御意見をいただければと思います。よろしくお願いします。

崎田委員　はい、ありがとうございます。東京 2020 宣言、やはり具体的な提案が出てきて、非常にイメージが、皆で考え易くなってきたかなと思います。今、2 つお話ししたいなと思っていました。

１つは既に今まで色々御意見が出ていますけれども、組織委員会とか、今度のオリンピックの関係者だけではなく、社会の一人ひとりが、例えば同じようなプレートをみんなで、例えば自分で持って、「東京 2020 みんなの D&I 宣言」みたいなことで一言しゃべるというようなことを、SNS でどんどん上げていくとか、選手の方に広報とか CM の時に「一言」言っていただくなど様々なやり方で、社会の人みんなで、「みんなの D&I 宣言」とか、「みんなのアクション宣言」ということを語れるような、そんな輪をつなげていったら素晴らしいのではないかな、というイメージが湧いてきました。

２つ目です。前回私は、みんなで「ゼロ」を色々取り組んできた、というお話もしました。そういうことから考えると、本当に今、ここのところ、日本もついに脱炭素、2050 年脱炭素というものを宣言していたり、資源を大切にするために皆で金銀銅メダルはちゃんと皆で全国から集めて作ったり、色んなことをやってきて、持続可能性に向けて、かなりみんなで努力してきたと思います。そういうことも、みんなで伝え合えるように、例えば色々な書類の下の「Tokyo2020」というところ（フッター）に「Tokyo2020 は持続可能な社会に向けて SDGs の実現にみんなで貢献しています」、というような言葉が必ず一言入るとか、何かそういう、みんなで持続可能な社会に向けて取り組んでいるのだという意欲の中で、この D&I 宣言みたいなことが、皆で広がっていくといいなという風に私は願っています。よろしくお願いします。

山崎座長　そうですよね。そうやって「皆でやっている」というところを、ちゃんと出していかないと、最初はひょっとしたらそういうコミュニケーションをとろうとしてやっていても、途中で主旨が誤解されて、「ああ、あれはなんか組織委員会でやっていることでしょ」みたいになってしまうともったいない話ですから、確かに「如何にみんなでやっているか」ということを示し続けられるかというところ、この辺りはすごく大事なのでしょうね。ありがとうございます。

それでは、次に陳委員に御意見をいただければと思います。前回、被害を受ける人に対する、いわゆる相談窓口的な部分も含めた、寄り添った対応の必要性ということを御意見いただきましたけれども、陳委員、東京 2020 宣言の方向性・主旨等についていかがでしょうか。

陳委員　ありがとうございます。おおむね今回御提案いただいた方向性でよろしいのではないかと思います。他の委員の皆様からも素晴らしい御意見が続出しまして、私の方からあえて付け加えることはほとんど無いように思えてきたのですけれども、１点だけ申し上げさせていただきますと、宣言名につきましては、先ほど黒田委員からも御意見のありましたとおり、やはり目指す社会を示すような表現で出した方がよろしいのではないかと感じております。

アクションメニューの方も、かなり各分野にわたり詳細に示されているように見受けられますし、「ねらい」のところにも書いていただいていますとおり、宣言する団体や個人が自ら考える、目標や取り組みなど、メニューに書いてあること以外にも、このオリンピック憲章の主旨

に反しない限りにおいて、そういったうものも宣言に盛り込めるような感じでいければいいのではないかと思いました。

山崎座長　ありがとうございます。先ほど、黒田委員の方からも御発言があったポイントだと思いますけれども、確かに「東京 2020 宣言」と出すと、ひょっとしたら独り歩きすることによって、「組織委員会がやっている宣言」のようになってしまうと、これは主旨が誤解されることになるわけですよね。「誰もが生きやすい社会を目指す宣言」とか、目指す社会に関しての表現が取り込まれるっていうことによって、組織委員会側からの発信ではない、みんなからの発信だ、というところを示すことができるのかもしれません。確かにその部分は考えなければいけないポイントだと思います。ありがとうございます。

それでは次は土井委員にお話を伺いたいと思います。土井委員は、Human Rights Watch の日本代表ということで、こうしたムーブメントに関しても経験豊富だと思いますので、その辺りからも御意見をいただければと思います。よろしくお願いします。

土井委員　面白いアイディアが出ているなぁと思って拝見していました。色々考えていただいてありがとうございます。

黒田委員からもありましたが、懸念としては、上から目線に見えないかということですね。森さんの騒動に発したことだというのは日本の皆さんはよく覚えているので、組織委員会というと実は戦犯的な立場にいる組織ということになるわけです。組織委員会やジェンダー不平等の問題がはびこっている社会にしてきた日本政府を含め、日本の中核を担ってきた人たちに対する反発が社会にある訳です。組織委員会側から個人や一般の民間に宣言させているだけで、自分たちは何をするんだ、と見られないようにしないといけないかなということが懸念ですね。組織委員会自体の宣言が、目標の高いものを示し、みんなにすごいなと思われるような、内容である必要があると思います。戦争の時の一億総懺悔ではないのですが、責任を国民だけに責任を押し付けて誰が責任を取ったのか？と思われる内容ではなく、ちゃんと組織委員会が責任を取ってリーダーシップを持って国を変えようとしているのだと分かるような高いレベルの宣言にするといいと思います。自分たちが変わったこと、自分たちが汗をかいていることもセットで示すことも大事です。宣言を働きかける先である一般の人が行動してくださることはいいことですが、そこに注力すると易きに流れてしまっているのでないかと言われてしまいそうであり、戦犯というのは良い言葉ではないと思いますが、ジェンダー問題を作り出してきたと社会に考えられている日本の政府等には少なくともしっかり働きかけていく、そしてしっかりした宣言を出すよう組織委員会から働きかけていくことによって、日本の人たちの大会への信頼を回復できるのではないかと思います。

スポーツのハラスメントの根絶宣言をしていくというのも資料の下の方にありましたが、例えば、組織委員会自体ができることの宣言としては、それもいいかと思いました。スポーツの中での暴力の根絶は組織委員会が扱うべき中心のイシューなので、色々なスポーツ団体と一緒に実施していくと良いかと思います。2013 年に色々な諸団体で根絶宣言が出されていたので、その更に一歩上をいくようなものを出すといったことも重要ですね。その他含め、組織委員会が自分自身に高いハードルを設定して、社会を変えていくムーブメントのリーダーとしての役割を果たすことも必要なのかなと思います。差別禁止の最低限のルールを作るのは国の役目で

すし、それを今まで政府が十分作って来なかったことに人々の怒りがあるわけなので、そこに働きかけをするということも大事です。

資料にステークホルダーとの連携という記載がありましたが、それはとても大事だと思います。組織委員会だけで考えて（宣言を）出してきたというと人々の信頼を得られないためです。またそのステークホルダーは政府が用意した人だけでなく、真に独立した厳しめと言われている人ともしっかり渡り合うようなミーティングにするべきではないかと思います。不当なことをいう人と話す必要はないと思うけれど、しっかりとした独立したところはたくさんあると思います。今回ジェンダーの関係でもたくさんの声があがってきたと思いますので、そういった人たちとミーティングすること。かつ、ミーティングに誰が出てくるかで真剣さも伝わるので、橋本会長含め高いレベルの方が出てくることが必要です。少なくともいくつかはバッハ会長を呼んで参加いただくくらいの意気込みでやってもらいたいと思います。

山崎座長　ありがとうございます。

今の話の本質的なポイントとしては、本当にどれくらいオープンにできるかということですね。オープンにしたふりというのは分かってしまいます。今回こういうムーブメントになったのは、森前会長のことがあって、「すみません、できていませんでした」ということがあっての流れがあるということは確認しないといけないですし、世の中にはできていない人も実際多くいるわけですので、できていないことを責めることに時間を使うことよりは、できるようにするためにどうすればいいかを考えるというところにみんなでいけるかということ、オープンな姿勢で示す、ということが大事ですね。オープンなふりをして、前のことが無かったことにすると思われてしまうと、ムーブメントになりません。ネガティブなことを言うであろうステークホルダーとも話し合って、できていないことと向き合って、減点主義的にも言わずに、長い道のりを一緒に歩んでいくんだというところがコミュニケーション上示せるかどうかで変わってくるんでしょうね。

次はパトリシア委員にお話を伺いたいと思います。前回の WG では、どういう社会を目指すかが大事だと言う御発言をされていました。その点は今回の宣言のコンセプトの中でもかなり中心的な要素になったと思います。方向性等々について御意見をいただけたらと思います。

パトリシア委員　どうもありがとうございます。みなさんの正直で素晴らしいコメントを聞いて嬉しくなります。こういう世界に住みたいところですね。全部ができたらオールグッドだと思います。

私の意見は先ほどのみなさんの意見とほとんど変わらないです。一つだけ、英語の点かどうかは分かりませんが、「Know Differences, Show Differences, Enjoy Differences」ということが書いてあります。Enjoy Differences の、楽しめること、はいいと思いますが、それは個人のことです。大会のレガシーに関してはもう少し社会的な言葉を使えばいいのではないでしょうか。楽しむだけでなく、受け入れられること、Accept Differences が必要だと思います。プラス Accept か、Enjoy の代わりに Accept という言葉がいいのではないかと思います。英語的にはニュアンスが違います。社会レベルから受け入れられることと楽しめるということはちょっと違うと思います。レガシーに対しては、「そういう社会を作りたい」という意味では足りないと思います。

コミュニケーションに対して、全部の国の言語に翻訳することはすごくいい目標だとは思いますが、今の社会では、翻訳ソフトがよくできているので、Access to translation software（翻

訳ソフトウェアにアクセスする）という目標で充分ではないかと思います。全部翻訳すると大変です。みなさんがそういうアプリを持っていれば十分ではないかと思います。

最後に、残念ながら、新型コロナウイルス感染症の状況です。日本ではみんなマスクをつけるのが当たり前となっていますが、他の国の方々はそういう考え方が当たり前ではないと思います。Respect for others' health、周りの人の健康のリスペクト、ということも書かないといけないと思います。それが新型コロナウイルス感染症のまん延する中で、安全になるのではないかと思います。これは個人権利の件です。よろしくお願いします。

山崎座長　ありがとうございます。Accept や Respect といった部分はキーワードになりますかね。Enjoy というのは、私が会議の中で思いつきで言った言葉でした。もう少しポジティブな Accept 的な言葉を入れられないかということで入れてみましたが、たしかにパトリシア委員の御意見はより本質を表しているように思います。いったん受け入れてどうするか、ということですね。

パトリシア委員　もう一つ、日本では宗教に対して、個人の価値が建前のような感じがします。外国人だと、自分の個人的な価値の反対していることからみれば、Accept という表現でないと本当に難しいと思います。合わないです。自分の価値と違うけれどあなたの権利が大事ですから受け入れます、反対していて楽しむことは考えられないけれど、Accept できるわけです。そういうことを考えていただきたいです。

山崎座長　そこはすごく重い部分ですね。日本は同調圧力も強くて、同じような価値観に寄っていると思いがちですが、実はそうではないというところを認めなければならないところがあるのでしょうね。それはやはり宗教的なバックグラウンドが欧米の方々と違うというところが一つ大きな部分としてあるのではないかと思います。実は同調しているようで価値観の違いというところに本質的な問題があるということも確かに多いのでしょうね。そういう意味で言うと、Accept というのは１つのキーワードになると、今お話を伺って思いました。

続いて、本 WG のアイディアマンといわれる松中委員からお話を伺いたいと思います。松中委員、まずここまでの意見を踏まえて、方向性、趣旨、進め方辺りに関しての御意見を伺えればと思います。

松中委員　タイトなスケジュールの中で、具体的にこういうことが日本全国で、世界の人も巻き込んでみんなでできたら、パトリシア委員のおっしゃるように ALL GOOD、素晴らしい社会になるのではないかと思いました。このような気持ちの下で、あえて、ネガティブな意味ではなく批判的にこの宣言のことをみていくと、ある一部の人たちだけの宣言にとどまってしまう懸念を凄く感じています。

これまでも政府など公の機関などが過去、色々な宣言ものをしてきたと思いますが、今考えると何があったかあまり思い出せないくらい、そのときの打ち上げ花火で宣言はしているけれど、その周りの方々だけにとどまっていることがもしかしたら過去は多かったのではないかなと思うので、組織委員会だけで呼びかけていくのではなく、どうやって周りの方々のモチベーションを高めていくかがものすごく大事なポイントだと思っています。先ほど土井委員もおっしゃっていたように、組織委員会から、見本となるような目標の高いアクションを、組織委員

会としての宣言をしていただくのが凄く大事だなと思いますし、全ての人がイマジネーションを膨らませていくのが得意なわけではなく、そうではない人もいますので、参考になるようなアクション、ロールモデルとなるようなアクションを積極的に声掛けしていくことが凄く大事です。特にこのような一方通行に見えがちなものをどうやってみんなでやっていくものにしていくかは、若い世代にはすごく大事で、今後絶対にこのレガシーを担っていく若い世代がしらけてしまわないような、彼らが主体になっていくようなものが大事かなと思います。どのようにモチベーションを高めていくかは分かりませんが、例えばそれに参加することで、メリットがあるといいと思います。金銭的なものではなく、自分にはこういうリターンがありそうだなというロールモデルやアクションを提示することも大切なことの一つかと思います。

２つ目は、もちろん大きな変化も大事ですし、小さな変化の積み重ねもすごく大事で、どちらとも大切ですが、東京 2020 大会で社会が大きく変わったと思える一歩になって欲しいと思っているので、一人ひとりができるアクションも大事ですが、コレクティブインパクト、色々な人が一緒にできる宣言というのも大事にしたいなと思います。それを自発的に一緒に組もうよと宣言するのもいいと思いますし、例えば東京 2020 宣言をどこかが呼びかけたときに「私もジョインします」と言える仕組みのようなもの、それなら自分もジョインしたいなということを可視化できるような仕組み、どこかの誰かが宣言していたけれど、後から自分も参加したかったとならないように、宣言したいと思えるものが提示されたり共有したりできるような仕組みになっているといいなと思いました。

３つ目です。宣言で終わってしまうことの一番の問題は、それを振り返る仕組みがない、それをどうしたいかというゴール設定がないことだということもあると思うので、まだ宣言前ではありますが、ロードマップに７～９月の大会時までしか記載がないので、その後この宣言をどうしていくのか、途中経過をどうシェアしていくのか、大会後にどう見返していくのか、もしかしたら、こういう宣言についてその後バトンをつないでいく仕組みも最初から考えておかないと、大会が始まってしまうとそれもなくなってしまうかもしれないので、振り返りを仕組みに組み込んでいくことが大事かなと思いました。

あとは、小さなことですが、ネガティブな視点でみると、人権労働・参加協働 WG として、例えば東京 2020 宣言の仕組みを面白おかしく活用してヘイト的なもので使ってしまうといったことが現れたときに、この WG としてどのようにアクションを起こしていくかについても事前に議論しておきたいと思いました。

以上、３つの前向きな批判的な意見とヘイトへの懸念でした。ありがとうございます。

山崎座長　この宣言の陥りがちな１番のリスクの部分ですね。前回の松中委員からは、コレクティブインパクトの部分で台湾のジョインの仕組みを説明していただきました。私もその発言に大変影響を受けました。本当にこれをすることで世の中にプラスになる、世の中が動きそうだと思ってもらえないと、参加は呼び掛けられないと思います。最悪なパターンというのは、「組織委員会があんなことがあって言い訳的に、エクスキューズ的にやっているんでしょ」と思われるとしらけムードが広がって、全くムーブメント感がなくなってしまう、そこは最も気を付けないといけない部分ですね。とりあえずやって、その後はなかったことにならないよう、ロードマップ作りが大事ですね。

多分２つポイントがあると思います。コレクティブインパクトの部分を出していくためには、組織委員会の外から象徴的な宣言を出す人がいて、それに乗るというムーブメントが、組織委

員会の動きとは違う所で起きる、もっとボトムアップ的な動きをいいものとするといいかと思います。あとは、どういうものとするかというゴール設定を考えると、記録として残ることによって大会が終わった後の財産にしていくということもすごく重要ですね。5年後・10年後のモニタリングといった部分もあらかじめゴールとして設定することによって、組織委員会は解散していきますが、その後も続くプロジェクトにしていくという明確なコミットメントが必要かなと直感的に思いました。ありがとうございます。

次は高橋委員から御意見をいただけたらと思います。よろしくお願いします。

高橋委員　東京都は、大会開催基本計画に掲げられる基本コンセプトの1つである「多様性と調和」を踏まえ、幅広い取り組みを展開してきました。スポーツの体験プログラム、競技施設・交通機関のバリアフリー化の促進、シティキャストの研修において性別等の違いを尊重し受け入れることの重要性について理解を深めてもらう取組など、大会後のレガシーも見据えて大会準備を進めてきました。

また、都では、令和3年3月に、明るい未来の東京を切り開くための都政の新たな羅針盤として「未来の東京戦略」を策定しました。その内容は多岐に渡りますが、その中で、様々な人が共に暮らし、多様性に富んだ東京、女性が自分らしく輝く東京を実現するため、都が様々な取り組みを進めていくと言うことを明確にされています。今後とも多様性と包摂性を高める様々な施策を通じて、共生社会の実現に向けて取り組んでまいります。

山崎座長　ありがとうございました。それでは、大川委員からご意見をお願いします。

大川委員　都の取組は先程申し上げたとおりです。

まず、宣言の目的についてですが、東京2020大会に向けて皆さんが取り組まれてきたことを次世代に引き継ぎ、それを行動としてやっていくという目的は非常に共感できるところです。やはり1人でも多くの人がこの取組をやっていくという意味では、この宣言がスーッと国民全体に広がっていく必要があると思いまして、そのためには、伝えたい大きなメッセージが何かを考えると、先ほど皆様からも話のあった「誰もが生きやすい社会」というのは非常にいいキーワードだと考えています。国民にしっかり浸透するようにいい形で出来上がるといいと思います。

山崎座長　ありがとうございます。いただいた意見をまとめると、おおむね方向性としてはいいとしても、コミュニケーションの部分を含めたやり方、ないしはどういうメッセージを込めるか、宣言自体をどのようにコンセプトを盛り込んだものにしていくかといったやり方の部分がすごく重要な課題になってくると思いました。

残り時間はやり方についての議論をもう少し深めていきたいと思います。先ほど松中委員からもアイディアがありましたけれども、「今までのよくある何とか宣言でしょ」と思われずに、みんなのムーブメントにしていくことができるかという点について議論を深めていきたいと思いますが、この辺りについて御意見があればお願いします。

河合委員　具体的なところに行く前に、みなさんの素晴らしい意見を聞きながら思ったところなのですが、まず、パラリンピック教育の「I'mPOSSIBLE」という教材を展開し、JPC と日本財団パラリンピックサポートセンターで事務局を行いながら、全国の小中高等学校に教材を提供しています。この中で、共生社会をどう定義しているか、あくまでこの教材の中での話ですが、「誰もが自分らしくいられる社会」という表現で子供たちに伝えているということをみなさんに御紹介したかったということが 1 点目です。

もう 1 つは、皆さんの御意見を聞いて改めて、アクションとしての宣言になるといいと思ったときに、どこを 1 つのゴールとして宣言していくのか考えました。ここからはアイディアに近いのですが、JPC は日本障がい者スポーツ協会 (JPSA) の内部組織です。JPSA が先月、「2030 年ビジョン」を出しました。その中に JPC の戦略計画もそこに位置付けています。そこで、パラリンピックのレガシーとして、パラスポーツ共生社会推進月間（仮称）を 8 月に設定して、D&I をどう推進したかをしっかり見ていきたいと思っています。ジャパンパラリンピックデーというのも、開会式の日（8 月 24 日）に合わせて実施していこうと考えています。そういった、来年までの 1 年間、自分の D&I の具体的にやりたいことを宣言し、それを振り返る瞬間を決めていくことによって、毎年スパイラルアップしていくような目標や方向性を組織・個人レベルで行っていくような積み上げができていくと、5 年後・10 年後にモニタリングするときの道程を確認する作業ができるのではないかと思いました。

それから、私も御紹介していただいたのですが、東京都さんが Twitter で親しみやすく共生社会・インクルージョンを伝えるべく「インくるの部屋」というのをやっていただいていて、結構反響が大きいなと思っていました。色々なエピソードがあって、子供たちなりにできそうなことも色々あるなというヒントが満載だなと思っておりますので、皆さんもよろしければ御覧ください。

山崎座長　河合委員、ありがとうございます。

オブザーバーで参加している林さんからも御意見を伺えればと思います。よろしくお願いします。

林オブザーバー　先程他の委員の方からも御意見があったように、上から目線にならないように、や大会の意義などを考えていました。東京 2020 宣言といったときに、組織というよりは、大会に向け御苦労されている一人一人に視点をあて、そうした一人ひとりからのメッセージが発信されるということが前面に出ていくことが重要かなと思いました。

加えて、大会の意義ということを東京 2020 大会ならではという視点で考えると、大会には 200 以上の多くの国・地域が参加しますので、日本にいる少数かもしれないけれど、そうじした国々の方々も巻き込んでみんなで一緒に作り上げていく、日本にいる少数の外国の方々含めて皆さんと輪を広げていく、そうしたことが東京 2020 宣言のメッセージとして含まれることが大事なのではないでしょうか。それが、東京 2020 宣言が上から目線ではない、なぜ宣言をするのかにつながるのではないかと感じました。全体としてそういう方向性で皆さんが参加すれば、大会後に続くものになっていくのではないでしょうか。

山崎座長　ありがとうございました。そのポイントは全く賛成です。前回もパトリシア委員が同様の点を指摘されていたかと思いますが、私はそれを踏まえてさらに広げると、海外のステークホル

ダーの方々は、何かできることはないか、と普段から言ってくれている方も多いので、これを日本人のムーブメントにする必要はないわけですし、海外のあらゆる国の方々、言語の問題はあるかと思いますが、トランスレーション技術は進んでいるので、どんな国の方であったとしても広く世界中の人からムーズメントに参加していただく、一緒にムーブメントを作っていけば、より良いと思いますので、非常にいいポイントだと思います。

個人についてですが、先程から出ているように、まずは組織委員会が襟を正して目標の高い宣言をすることも１つのアイディアとして有効だと思いますけれども、組織委員会にいる方々もそうですし、スポンサーなどの関係組織にいる人、そうでない組織にいる方など色々いらっしゃると思いますけれども、個人個人が宣言ができる環境づくりもポイントかなと思います。どうしても日本社会に生きていると、こういうことを言うと組織にマイナスなのではないかと、自分の意見がなかなか言えない環境にいらっしゃる方も多いかと思います。そういう中ですので、多くの方々が、D&I について個人的に思っていることを自由に言えないということがあると思うので、それをいかに解決していくかも考えていかないといけない話だと思います。松中委員の御意見にあったように、この宣言を面白おかしく捉えて、宣言の内容を攻撃したりヘイト的に使ったりといったところもないようにするところも合わせてやっていかないと、結果みんなおそれて宣言しないという風になると意味がなくなる訳なので、そういうことはルール的になし、宣言のレベルなどを批判しない、という約束事がないとなかなか上手く機能しないのではないかと感じていますが、具体的なやり方について御意見をいただければと思います。

松中委員　巻き込みの話で１点、御協力いただければ、ということですが、発信力、可視化していくことがとても大事だと思うのと、組織委員会が大会後解散するということで、その後もきちんとバトンを受け継いで長期的に実現していくためには、パートナー企業さんの力がすごく大きいのではないかなと思います。今日も多くの方が参加してくださっていますが、パートナー企業の方々と一緒に考える機会を設けさせていただいたり、企業の方々に宣言の主体になっていただいたり、企業の方々が一部コレクティブインパクト型のものを一緒に企画して世の中の人と一緒に宣言していただくなど、積極的にパートナー企業の方々に御参加いただくというのが東京 2020 大会にとってすごく大きいのではないかと感じました。

山崎座長　そこはすごく大事なポイントですね。付け加えると、メディアの方々の御協力もすごく大事で、これを面白おかしくすることもできますし、みんなのムーブメントにすることもできる。どういう風に展開していくかというコミュニケーションの部分を間違えると、せっかくのプロジェクトも意味がなくなってしまうわけですから、この辺りは非常に重要になってきます。発信力のある方に御協力をいただき、発信力のある方はこれをムーブメントだと認識していただいた上で、それぞれの宣言に固有の価値があって、茶化したりしない・ネガティブにしない・批判しないといったルール決めの部分などのアイディアを出し合うというムーブメントにいかにできるかということがポイントになってくるのかなと思います。

ここまでの議論をまとめますと、まず、この宣言は組織委員会のムーブメントではなく、組織委員会がきっかけではありますが、みんなのムーブメントにしていくためには、スポンサー含めた組織委員会の外の方々が、主体的に宣言していってその宣言に乗りたいといったようなムーブメントがいくつも生まれる、ということが起こっていくと非常に理想的なのではないか

と思います。そしてそれが個人の立場で参加してもネガティブに取り扱われないという空気感も大事です。組織委員会は組織委員会として、今までも十分にジェンダー平等などに取り組んできてはいますが、もっと高い目標を目指していくということも同時に盛り込んでいくことも大事なのかと思いました。

あとはモニターしていくという体制をいかに作っていくか、ということです。これは組織委員会というよりも、組織委員会の周りにいる我々、宣言するそれぞれが「毎年何月何日にはモニターします」といった宣言をするというのも宣言のひとつにするなどの、宣言の工夫も必要なのかと思いました。

それでは、時間もなくなってきましたので、ここで一旦締めさせていただきまして、今後の予定・進め方等について事務局より御説明をお願いします。

荒田部長　山崎座長、ありがとうございました。

また、みなさま、この宣言を意味あるものにしていくための具体的でかつ重要なご意見をたくさんいただきましてありがとうございます。

冒頭にも御説明しましたが、本日いただいたご意見については、ジェンダー平等推進チームに共有するとともに、週明けにもまた理事会がありますので、そこでも御意見をいただきながら、東京 2020 宣言について詳細を整理・調整していきたいと考えています。

最後に、小谷 SD と総務局長の手島より一言御挨拶させていただこうと思います。まずは、小谷 SD よろしくお願いいたします。

小谷 SD　本日も、非常にプロアクティブな御意見を沢山だしていただき、ありがとうございました。前回、今までで参加したリモート会議の中で 1 番パッションを感じて有意義で楽しかったと感想を述べたことを覚えていますが、今回も途中から飛び込んでも、身を乗り出すようなみなさまの心のこもった、そして学びにつながるコメントの数々に、またしてもメモしているうちにペンのインクがほとんどなくなってしまいました。

前回、皆様からいただいた御提案のうち、かなりのことがその後、具体的に進みました。ジェンダーについて学ぶ重要性について御指摘いただきましたが、前々回の組織委員会の理事会ではオリンピック憲章とジェンダーについての講演会をいただき、学ばせていただきました。

理事たちもしっかりと研修を受けるべきという御意見に対しては、橋本新会長や私も、4 月に組織委員会の新人がみんな受ける D&I 研修に参加させていただきました。

発信が大切ということに関しても、組織委員会の HP に特設ページも設け、初回は、橋本会長、高橋アスリート委員長、私の 3 人が、ジェンダーをはじめ様々な取組について意見を交わさせていただいたものがまだ載っていると思いますので、もしよろしければ御覧ください。

また、フォーラムなどを通して、どんどん色々な人を巻き込んでいくべきという点に関しては、オンラインフォーラムが決まりました。5 月 10 日には、パートナーの皆様の非常に積極的・先進的に取り組んでいらっしゃる取組を紹介していただき、意見交換させて頂くことになっています。既に本当に様々な取り組みをされている 40 社以上のスポンサー企業さんから本当に色々な情報をいただきました。皆様からお話をお聞きしたかったのですが、その中から 7 社を選ばせていただき、勉強会を実施させていただきます。5 月 15 日にはオンラインフォーラムを

行い、橋本会長に冒頭でインタビューという形で参加いただき、後半のパネルディスカッションには私も参加させていただきます。

等々、皆様からいただいたアドバイスや御意見は少しずつ実行に移しております。昨日 IOC 理事会がありましたが、私が SD になったばかりのときの IOC 理事会では、このような困難な中での準備は東京しかできない、ありがとう、１年延期した中で開催できるのは日本しかないという賛辞を多くいただいていたのですが、昨日の IOC 理事会ではジェンダーを含む D&I 推進に対しての期待と謝意を多くの委員からいただきました。先日はコーツ調整委員長からも、ジェンダーへの取り組みは東京 2020 大会の何よりのレガシーになるだろうというコメントをいただきました。世界のスポーツ界の方々にも、東京がこのような取組を橋本会長の下進めているということは、非常に広く知れ渡り、大きく注目されているところです。

また、先日は IOC のアスリート委員会の方からも、ルール 50 に関して、オリンピックのときにアスリートが個人の色々な思いや主張をアピールしていい場所について改めて世界中のアスリートで意見が交わされました。観点だった表彰式や競技場レベルでは個人的な発信はすべきではないということでまとまったのですが、その代わりに選手村や開会式で皆で発信していく機会が欲しいという意見が出た中で、そのメッセージとして、ジェンダーイクオリティや D&I をしっかり発信したいということも IOC アスリート委員会主導でも寄せられ、IOC 理事会でも承認されました。

このように日本の組織委員会だけではなく、世界の中でも非常に関心が高まって声が上がっている中で、組織委員会としても取組を進めていきたいと思いますし、今日も多くの方に御指摘いただいたように、出しっぱなしではなく、次に続いていかないと意味がないと思います。JOC は組織委員会よりもずっと前からジェンダーの取組を進めてきていましたが、その中での、JOC 会議でのあの発言があったという時系列になりますが、今ジェンダー・多様性の取組を熱心に進めていますので、大会後には、JOC、そして JPC にもつないで、レガシーとしていただけるよう、また、大会を通しての取組は、大会報告書の中に残していきますので、都や国に対してもレガシーとして残していきたいと思います。

最後に、私自身、皆さんからの御意見を含めて、ジェンダー平等推進チームのヘッドになり色々な勉強させていただく中で、すごく変わったことがあります。最近、街を歩いていく中で、「ここって全ての人にとって使いやすくなっているかな」、「こういう見方ってどうかな」と視野が広がりました。ゲイの友達もいますが、彼に対する見方・考え方も凄く変わりました。その変わったことで、色々な視野が広がって、自分が豊かになれた気がします。難しいことを勉強しなくても、ちょっと視野を広げられるだけで、自分自身の人生が凄く豊かに楽しくなるのだということもあわせて個人のレベルでも発信したいと思います。

引き続きみなさまの御指導、どうぞよろしくお願いいたします。本日は非常に貴重な御意見をありがとうございました。

手島局長　本日も活発な御議論をいただきありがとうございました。大変参考になりました。全体につきまして、方向性については御了承いただいたと認識しています。

また、今後の進め方につきましても、いただいた御意見を踏まえて検討していきたいと思います。委員会の中でもありましたが、宣言が上から目線の、押しつけの形になってはいけないと思いますので、そのためにどうすすめていくかについては委員の皆様からあらためてお知恵

を拝借したいと思っております。

山崎座長からもありましたが、人を変えるよりも自分が変わっていくための宣言が重要だと思います。自分が変わることによって社会が変わっていくというムーブメントをいかに起こしていくことが大事だと考えています。そのためには、黒田委員からもありましたが、コミュニケーションの取り方が大事だと思います。そこがうまくいかないと、これまで組織委員会も色々取り組んではきましたが、それがあまり伝わっていなかったということもコミュニケーション不足の最たるものかと思っているところですので、そこを如何に伝えていくかを丁寧にしていけたらと思っています。松中委員からもありましたが、リスクについても上から目線にならないという点と合わせて取り組んでいかなければならないと認識しました。パトリシア委員からは、価値観が違うけれど受け入れるという意識が大事だと思いましたので、宣言名がどうなるかは未定ですが、ぜひ参考にさせていただきたいと思います。

これからが正念場だと思っていますので、委員の皆さんから御指導いただきながらいいものを作っていけたらと思っています。今後ともよろしくお願いします。

山崎座長　ありがとうございました。それでは、お時間になりましたのでこれにて閉会させていただきます。

本日も素晴らしい意見をいただきありがとうございました。御参加いただいたみなさま、ありがとうございました。オンラインでなかなかみなさんとコミュニケーションを取れない状況ですが、少しでもこれをきっかけにたくさんのコミュニケーションが生まれ、せっかくのオリンピック・パラリンピックの開催権を無駄にしないようにオリンピック・パラリンピックを上手く使ったムーブメントをみなさんで一緒に作っていけたらと思います。みんなでがんばっていきましょう。本日はありがとうございました。